ウィザード－install －

紅姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウィザード－ｉｎｓｔａｌｌ －

【Ｎコード】
Ｎ２０４３ＢＡ

【作者名】
紅姫

【あらすじ】
世界のネットワークを破壊したウィザード。
そして、主人公　周辺で起きる事件。
近未来を舞台にした物語の開始。

data 1

ー西暦２０３１年7月１１日　周南市ー

夏と言う事もあり、空にさんさんと輝く太陽は高校に向かう学生達の気分を落ち込ませるには十分であった。

「あっちいー。どうなってんだよ？今年は異常気象か何かかよ？」

突然、声を上げたのは東雲一馬（しののめ かずま）と言う。
西南高校に通う高校3年生である。
着崩すした時代遅れの学ランが少年がどれだけこの暑さで参ってるのか物語っている。

「一馬、仕方ないよ。夏は暑いものって相場がきまってるんだから。それに今日は夕方から雨振るみたいだよ？」

一馬の言葉にやんわりと包み込むように反応したのは、夏草葛葉（なつくさ くずは）と男の子であった。
身長が１８０ｃｍ近い一馬と比べて葛葉は身長が１６０ｃｍほどしかない。
葛葉は自分の身長にコンプレックスを持っており、一馬と比べると２０ｃｍの差がある事から、神様は死んだ！と溜息を最近はついてばかりいる。

「ったく、雨と言えば女子だろ！なんで俺達の高校は男子校なんだよ！野郎の裸を見てもうれしくねーんだよ！」

一馬は自分の心で思ったことをそのまま、口に出す癖があり、それが原因で喧嘩が絶えない。
それでも持ち前の身長と、実家が古武術を教えてる事もあり無双の強さを誇っている。

「なら、共学にすればよかったのに…。」

葛葉がボソッと口に出した言葉に反応すると、一馬は葛葉の首に左腕を回して右拳で頭をグリグリを押す。

「い、痛いよ、一馬。それに暑い、暑いよ！男同士でくっつかないでよ！」

「悪うございました。俺の頭で共学の高校に行ける訳ないだろ、それにあそこは私立だし…。」

その言葉と同時に一馬は、すまないなと言いながら葛葉の首から腕を放し道路に置いたバックを持って坂上に見える西南高校へ向けて上っていく。
葛葉もすぐにその後を追いながら、待ってよ！と声をかける。
一馬もそれに気がつき、歩く速度を落とす。

「一馬、ごめん。本当にごめん。」

葛葉は歩きながら、再度謝ろうとするといつの間にか振り向いた一馬が葛葉の頭の上に手を置く。

「別に気にしてねえよ。それに、あれは世界情報連結機関切断事件（ユグドラシルクラシュ）はお前のせいじゃねえし」

「う、うん。」

一馬のその言葉を葛葉は聞きながら、葛葉はまだ一馬が落ち込んでいることに気がついていた。
幼稚園時代からの付き合いなのだ。
一馬が、いつ落ち込んでいるかすぐに分かる。
微妙な気持ちのまま、葛葉は一馬の後を追いかけた。

「あー。かわいい彼女ほしいぜー。」

追いかけながら、葛葉はその言葉を聞いて、やっぱり一馬だよねっと思っていた。

進みすぎた科学は魔法と区別がつかないと言ったのは誰であろうか？
２０２２年に日本の企業が開発したナノマシンにより電子通信情報は一気にその用途を広げた。
それは、直接人へ注入する事により必要に応じて、視界上に情報を投影する事が出来るモノであった。
つまり、電子機器を持たずともインターネットを行ったりする事が出来る。
それは医療方面にも広く使われた。
得に、年配の方やペースメーカーなど命の危険に関する事に関しては率先して取り入れられていった。
それと同時に、そのナノマシンは人々の明日を見守り命を守る守護者と言う想いを込められ世界情報連結機関（ユグドラシル）と名づけられた。
それも２０２５年に起きた、ウィザードと呼ばれた三人のハッカーにより終わりを告げた。

２０２６年を目処に、新しいシステムを追加する予定であったプログラムの隙をつき、世界中のホストコンピューターを同時にシステムダウンさせたのであった。
それにより、医療に幅広く使われていた事により多くの人が命を落とす事となってしまう。
推定では１０万人近い人間が死んだと言われている。
公式で１０万人である事からもっと多い事は言わずとも知れる。

そして２０３０年に改定された国際連盟の条例により現在は、将来を見据えた世界情報連結機関（ユグドラシル）の再構築を構想に居れ実験が始められていた。
実験の場所に選ばれたのが日本の周南市であった。
セキュリティの観点から、世界情報連結機関（ユグドラシル）のホストコンピューターは大津島に置かれる事となった。

実験が始まり１年が経過していた。

実験の施設のために国連、日本の政府から巨額の投資が市に行われ、それをサポートするスタッフ、家族、国連の調査員などが常駐しており、大企業も先駆けて進出しておきており周南市はここ数年で、人口５０万人を有する巨大都市（メガロシティ）となっている。

「ここテストに出るからなー。覚えておけよ？」

船を漕いでいた、葛葉は先生のテストにでるからなー。と言う言葉に驚きハッと目を覚ますが、時すでに遅し、テスト範囲が書かれていた黒板は消されてしまっていた。
それを見た、葛葉はハーッと溜息をつきながら、机の上に置いてい

た教科書などを片付け次の授業の体育の用意をするために体操着の入った袋を机の横から手に取ると着替え、体育館へ急ぐ。
階段を下りてる途中で、左目の視界に『メールが届きました』と表示される。
葛葉は、頭の中でメールの差出人をチェックすると、差出人は空欄になっている。
世界情報連結機関（ユグドラシル）の実験都市となっている周南市において、不確定要素が発生する可能性のある差出人不明のメールが送れるのはおかしかった。
葛葉は、その事に気がつきながら、バグだと市に報告する義務もあった為、削除するかどうか思案してる所で、次の授業の開始のチャイムが鳴り響き、メールは後回しにする事にした。
階段を下り、渡り廊下を全力で走っていく。
そして、体育館に入ったところで全員がすでに並んでいるのが視界に入る。

「やば、遅刻かな？」

体育の男性教師が葛葉が入ってくるのに気がつくとすぐに並べと声を張り上げた。
「葛葉はすいません、遅れました。」と言いながら、体育教師の横を通り過ぎようとした所で首から下の感覚が無くなり、体育館の床に倒れこんだ。
周囲にいるクラスメイト、そして体育教師、親友の一馬が走ってくるのが見え、そこで意識が途絶えた。
意識が消え去る一瞬、左目の視界には、《ｍａｓｔｅｒ　Ｗｉｚａｒｄ　ｉｎｓｔａｌｌ　》と表示されていた。

data 2

学校の保健室のベットの上で、葛葉は寝ていた。
体育館で倒れた葛葉を、ここまで運んだのは、一馬であった。

「もう帰ってもいいのよ？」

そう言って、一馬へ声を掛けてきたのは、ここ西南高校の保健医の瑞希であった。
すでに、高校の授業である最後の体育の時間が終わり２時間が経過している。
保健室の窓越しに校庭を見るとすでに帰宅の生徒は見当たらず、日もほぼ沈みかけている。
つまり夕方であった。
時間としたら１８時頃であろうか？
生徒の帰りを心配した大人が気を利かせているのは当然と言えば当然である。
そのために出た言葉であったのなら…。

「いや～、俺は葛葉が起きるまで此処で、待ちますよ。」

その言葉に、瑞希は「エーッ」と言う抗議の上げた。

「可愛く言うなよ。２９歳の瑞希先生」

瑞希は、一馬のその言葉に、ムーッとほっぺを膨らます。

「私ってそんなに信用ないの？極めて遺憾だわ！」

瑞希のその言葉に一馬は、真面目な顔をして頷き即答する。

「信用ねえ？２９歳の独身、瑞希先生と葛葉を同じ部屋にするのは虎の檻の中に羊を入れるようもんだし。」

そう言って一馬は瑞希の方へ視線を向ける。

瑞希は、白いブラウスとスカートを着用しており上から白衣を纏っている。
顔は整っておりどちらかと言えば美人に属する。黒髪を肩まで伸ばしており、髪は後ろでバレットで纏められている。
見るだけなら、スタイルも整っている事から引く手あま手なのだが、大酒飲みの酒乱であり、一昔前に流行った車のアニメを見て憧れて峠を攻めている事もあり、
１０人近くいる女性教諭の中で校内彼女にしたくない先生ランキングＮｏ１を５年間、独占していると噂であった。

「２９歳、２９歳って失礼じゃないの？まだ、お肌はピチピチよ～」

言いながら、瑞希は体をくねらせている。

「変な踊りすんなよ！気持ち悪いから止めろって」

一馬は、葛葉のベットに腰をかけて話をしてるとうめき声が聞こえてくる。

瞼を開けると、そこは見慣れない天井であった。
人の気配を感じ、視線を走らせると、そこには一馬と瑞希が丁度、自分の方へ視線を向けてくる所であった。

「葛葉、大丈夫か？体はもう、何とも無いか？」

一馬はベットに腰を掛けていた事もあり、体を乗り出して葛葉へ聞いてくる。
いつものだるそうな雰囲気と違って、表情は真剣そのものであった。

「ごめん、一馬。心配かけたよね？」

「べ、別に、大丈夫ならいいんだよ。それより、念のために医療検査（メディカルチェック）しておけよ？」

「う、うん」

一馬の言葉に頷きながら、葛葉はベットから起き上がるとネットワークを立ち上げる。
同時に視界に、《ＡＢＩＳ》と言う文字が表示され、体内に注入されたナノマシンが脳内に構築したシステムが起動する。
視界には、周南市医療技術センターへ接続中と表示された後、いくつもの項目が表示される。
その項目の中から、全身検査と言う項目をチェックする。
チェックを入れ、開始を選ぶと体中に散らばっている体内のナノマシンが全身を調べていく。
ほどなく、体内のチェックが終わり問題ないと表示される。
その結果を、瑞希先生と一馬へ送信すると二人とも安心したような顔をした。

「しっかし、すげえよな。周南市の外の世界だと、たくさんの機械を使って何時間待たされて検査するんだろ？
技術の進歩ってすげえよな。保険医の瑞希先生いらねーじゃん」

「それって私から職を奪う発言なの？一馬くん？先生を貰ってくれるならそれでもいいけどね。それとも私と一緒にドライブでもいく？」

瑞希の言葉に一馬は必死に首を左右に振った。
その顔は、些か青ざめてるように見える。
一馬は急いで荷物を纏めると葛葉の荷物が入っているバックも持ち、葛葉を連れてダッシュで保健室を後にした。
後ろから、廊下は走ったら危ないわよーと言う声も聞こえてくるが自分の命の方が大事であった。
葛葉は一馬のそんな顔を見て、笑っていた。

下駄箱まで行き、外履きに着替えると葛葉と一馬は、校舎から足を踏み出す。
すでに、日は沈みかけており辺りは薄暗くなってきている。

「葛葉、さっさと帰ろうぜ。」

「うん、そうだね。早くしないと危ないしね」

校庭を横切り学校の正門を超える。
坂道を下ってる所で、一馬は葛葉の襟首を掴み後ろへ下げ葛葉を守るように一歩前へ踏み出した。
襟首を突然、掴まれた葛葉は学ランの襟首で喉を突然、圧迫された事で「ケホッ、ケホッ。」と咳をあげる。

「ひどいよ、一馬。何するの？」

葛葉は、一馬に抗議の言葉を掛けるがいつもは即答で返ってくる言葉が帰ってこない。

そして、一馬の顔を見るといつになく緊張した顔をして真正面を向いている。
葛葉も前に視線を向けると一人の２０歳くらいの大学生が坂道のガードレールに腰を掛けて自分達を見ているのが分かった。
一馬はこの大学生を見て、緊張しているのに気がついた葛葉は疑問に思ってしまう。
幼い頃から一馬は、古武術を学んでいたこともあり、喧嘩にはめっぽう強い。
１０人以上の暴走族を相手にした事もあったが、傷一つ負わずに相手を叩きのめす事が出来る程の実力の持ち主である。
その一馬が、たった一人の人に緊張しているのは、葛葉にとっては不可解であった。

「く、葛葉。に…げ……ろ……」

言葉が途切れる前に、一馬が葛葉の前で突然、崩れ落ちるようにコンクリートの道に倒れこむ。
その光景に、葛葉の頭の中は真っ白になってしまう。
突然、起きた事に頭が理解を拒んでいたのであった。
そして、倒れた一馬の体からは一滴の血も流れていない、なのに何かされたと言うのは理解出来た。

先ほどまでガードレールに腰を掛けていた男へ視線を向けると男の右手は人のモノとは大きく違っていた。
人の右手の数倍の長さがあり、先が尖っている。
それはまるでランスのようにも見える。
男は葛葉に視線を向けると呟いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2043ba/

ウィザードーinstall ー

2012年1月6日02時47分発行